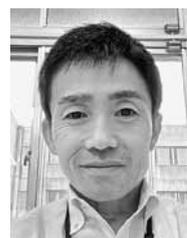




子供も大人も一人一人が輝く 学校づくりを目指して



佐倉市立内郷小学校校長 やまもと けんた 山本 健太

1 はじめに

私は現在の職に至るまで、中学校で14年間特別支援学級の担任を、佐倉市教育委員会で9年間特別支援教育・就学指導の担当指導主事をさせていただいた。その間、たくさんの子供や保護者、園や学校、関係機関の皆様との出会いがあり、その経験から子供の成長について様々なことを学ばせていただく機会に恵まれた。

この職に就き、ぜひこれまで培ってきた特別支援教育の視点や考え方を生かし、一人一人が力を発揮し、輝くことのできる学校づくりをしてみたいと考えていた。

今回執筆の機会をいただいたので、拙い実践ではあるが、私の学校づくりについて、その考えを述べさせていただく。

2 特別支援教育の視点とは

特別支援教育の視点にはいくつかあると思うが、私は、「苦手なことに焦点を当てて改善・克服に力を注ぐよりも、得意なことに注目して伸ばすことで自分への期待値を高め、そのもてる力を最大限発揮できるようにする教育」と捉えている。そして人の成長とは、小さな点の積み重ねであり、時間がかかるものと考えている。現在勤務する学校は通常学級が6学級、特別支援学級が2学級の合計8学級で全校児童は162名という小規模校である。それでも、困難さを抱える児童は一定数存在する。そして教職員も、それぞれに持ち味があり、一人一人に様々な個性がある。

私は、子供に対しても、共に働く教職員に対しても、一人一人の違いを丁寧に見て、その違いに適した働きかけをし、それぞれが自分に自信をもち、最大限の力を発揮することで、学校全体が生き生きと生活できる場になると考え実践している。

3 具体的な取組の一例

(1)児童の実態を全教職員で正しく把握

どの学校でも児童の実態を共有する場があると思うが、本校では毎週1回全職員参加の「生徒指導・特別支援会議」を位置付けている。そこで発信される児童の課題や成長の様子を職員で共有した上で、それぞれの立場でのアプローチの仕方を考えたり、成長の様子を確認したりする場になっている。

私はこの会議の中で児童の発達や、成長の背景にあると思われる効果的な手立て等について発信するよう努めている。

(2)迅速な校内委員会の開催

校内で児童が不適應を起こしていたり、保護者からの相談を受けたりした担任から報告を受けることがある。このような場合には、その児童に関係が深い職員を集め、迅速に校内委員会を開催している。あるケースでは担任・養護教諭・管理職で、また別のケースでは担任・特別支援学級担任・管理職のように、出来る限り少人数で時間を空けずに開催する。これは児童への適切な指導・支援や、具体的な対応方法を保護者に示すことにより、不安

を軽減させることはもちろんであるが、誰がどのように指導・支援するのかについて道筋を立てることで、担任一人が抱えることのない体制作りを行い、安心感をもたせることも大きな目的と考えている。

(3)校内巡回と職員へのフィードバック

校長が授業を巡回し、教職員や児童の様子を確認している。教職員の中には頻繁に校長が教室を参観に来ることに抵抗がある者もいる。教科指導に高い専門性がある管理職であれば、授業を参観し、その内容について適切な指導や助言ができるが、残念ながら私はその専門性は持ち合わせていない。そこで、私が授業を参観する際には、児童の良い方向への変化や授業に向かう姿勢、教職員の効果的な児童への関わり方を拾うようにしている。そしてそのことを職員室で話題にして児童の変化を共有し、その変化の裏に教職員自身が考えた手立てや工夫があったことが伝わるようにしている。大半の時間を一人で児童を見ている小学校教員にとって、その成長や望ましい変化を共有できる時間は、指導への自信を高めることにつながると考える。

(4)一人一人のやりがいを高める役割分担

本校のような小規模校であっても校務分掌は他の学校と同様に存在し、一人当たりが抱える数は必然的に多くなる。教職員の負担を平等にするには、分掌の数を同数にすることが理想であるが、組織とはなかなかそのようにいかないのが現状である。

同じ教職員であっても一人一人の適性や経験は様々である。組織の力を最大限高めるためには、分掌の数こそ偏りはあっても、自分が学校経営に参画しているというやりがいと、誰一人欠けても運営出来ないという自己存在感がもてるのが重要である。一人一人の適性を十分に

把握し、組織で自らの力が発揮できることによる自己肯定感を高めるために、常に教職員を見て、その業務の遂行に対して即時評価と感謝を伝えることを忘れないようにしている。

(5)ボトムアップ型教職員集団の育成

組織ではよく、「ボトムアップ」と、「トップダウン」という言葉が使われる。いずれにも長所と短所が存在するが、私はボトムアップ型の組織づくりを目指している。教職員がお互いに意見を出し合った末の考えは、私の考えよりも優れた方向性になることが多い。

健全なボトムアップ型の組織になるように、教職員の中で信頼されるリーダーを育成するとともに、常に「お互い様」の意識をもって、職員間の風通しが良くなり、自ら考える組織のための働きかけを心がけている。

(6)校長の役割の遂行

校長として大切な役割の一つが自分の考える学校づくりを校内外に発信することである。一人一人の違いを認め、適切な配慮と手立てで最大限の力を引き出す教育活動の場にするのを、学校だより等で保護者や地域に発信している。学校として何を大切にしているのか、その考えを明確にすることで、保護者は、他児との比較ではなく、わが子の成長に目が向けられるようになると考えている。

4 おわりに

私にとってこれまでの経験から得た特別支援教育の視点は唯一誇れるものである。これからのこの視点による学校づくりを継続したい。そして、「この学校で学んでよかった。」、「この学校で学ばせてよかった。」、「この学校に勤務出来てよかった。」と思ってもらえる学校づくりを目指したい。



子供たちと共に歩む学校を目指して



松戸市立高木第二小学校教頭 きたばやし まり 北林 真理

1 はじめに

「のびよ のびよ 麦の穂よ」これは本校の校歌の歌い出しである。80年前の創立当時、学校の周りに広がる麦畑の麦のように、強くたくましい子に育ててほしいという願いから、本校の学校教育目標は「ひとみ輝くむぎっ子～すすんで・げんきに・たくましい子の育成～」としている。

私が本校に着任したのは、コロナ禍真ただ中の令和3年だった。この2年間は、新型コロナウイルス感染症への対応に奔走する毎日であった。改めて、学校がすべての子供たちにとって生きる希望や夢を見出すことのできる場所であること、安心して過ごすことのできる場所であること、変化の激しいこれからを生き抜く力を育む場所でなくてはならないと感じた。

子供たちの未来を育む学校に必要なものは、教職員と地域の力の結集であると思っている。教職員一人一人が個々のもつ力を発揮し、地域との協働を図り、「子供たちのために」一丸となって教育が進められるように日々取り組んでいる。

2 職員と共に

(1)「聴く」ということ

職員室にいと、ひっきりなしに職員が声をかけてくる。そのたびに動かしていた手を止め、話に耳を傾ける。教頭という立場になるときにいただいたアドバイスを実行している。そうしてきたことによって、職員は、大

きな問題だけでなく、些細なことでも話しにきてくれる関係ができていたのではないかとと思う。些細な話の中に、早期に対応できる問題があったり、思いがけない情報があったりする。今後も「この人には、いつ何を言っても受け止めてくれる」「話してよかった」という安心感をもってもらえるような「聴く」を心がけていきたい。

(2)「聞き合う」ということ

一方で、聞き合える関係も重要である。職員同士が会話をすることで気づきが生まれたり、新しい発見があったり、意思の疎通が図れたりする。私のところに来る職員の話話を、あえて分掌担当やその分野に長けた職員に振る。職員同士がつながり、新たなネットワークが生まれる。また、聞き合うことは若年職員にとって貴重な学びの場となり、自身の指導の幅が広がり、先輩職員との関係性も向上し、同僚性を高める。聞き合うことのできる職員の様々な結びつきは、互いの信頼感を高め、風通しの良い関係づくりにつながり、職員室の良好な雰囲気は、そのまま子供たちのいる教室へとつながる。聞くことに価値を見出せる職員室となるように、私自身がためらうことなく聞くようにしている。

(3)信頼と感謝

教頭の仕事は、多岐に渡り、学校全体を視野に入れた業務になる。必然的に仕事の分だけ多くの担当や職員と関わることになる。しかし、それこそが職務を円滑に進めることにつながっていく。校内には、事務職員、養護

教諭、栄養教諭、技術員、スクールカウンセラー、日本語指導などの専門職員がいる。事務職員に予算について相談をすれば、よりよい計画の立案ができる。養護教諭にコロナ対策の進め方を相談すれば、よりよい方向性を導くことができた。どの職員も自身の役割に誇りをもつスペシャリストで、頼りになる存在である。個々の職員がもつ力を最大限に生かすことができるよう、職員同士を有機的に結び付けることができるよう努めている。

3 地域と共に

(1)地域の力を授業に生かす

本校の「むぎっ子」の由縁である麦畑は、残念ながら近隣には見られない。そこで「子供たちに本物の麦を見せたい」という思いから、農業に詳しい地域の人材を生かし「麦の会」を立ち上げ、平成28年、校庭の一面に麦畑をつくり、5年生の総合的な学習の時間の中で麦栽培を行った。麦栽培という貴重な体験活動からの学びは大きく、さらに生きた学習を体験させたいという思いから、平成29年、校庭の南東の一面に田んぼを造成した。これも、「麦の会」の方が中心になって行ってくださった。田植え、稲刈り、麦まき、麦踏み、麦刈り、脱穀、精米・製粉など、全ての行程で「麦の会」が地域の先生となって関わってくださっている。また、本校は自校給食であることを生かし、麦はすいとんに、米は米飯として全校児童に提供している。すいとん、米飯給食当日は、「麦の会」の方をお招きし、体験した学年児童と共に、一緒に食していただいた。この一連の貴重な体験を通して子供たちは、麦の強さに感動し、農作業の苦労や喜び、食べ物のありがたみ、日本の食文化への誇りなど、計り知れない学びをしている。季節や天候に関わるこの活動を円滑に進めら

れるよう、「麦の会」の方との連絡調整は欠かせない。また、支援をしてくださる機関を探したり、連携したりすることも大切な私の役目である。

(2)地域と共に安全を守る

本校には「高二小交通安全の日」が設定されている。これは、本校児童に起こった痛ましい事故を忘れないためである。

学区には、幅の狭い道路が多く、学校脇を車の往来が激しい県道が走っている。子供たちの登下校には心配な状況である。そこで立ち上がってくださったのが、PTAと見守りをしてくださる三つの地域団体である。子供たちの安全は、保護者と地域の方によって守られている。子供たちの見守りをして下さっている方々には、下校時刻を知らせる文書、地域の方には学校だよりを配付している。今年度からは、PTAが見守り隊と連携して、連絡を取ってくださるようになった。また、例年1年生が書いている見守り隊や110番の家へのお礼状も、PTAの方で葉書を準備し、投函までしてくださっている。こうした活動は、これまでの学校運営に根付く信頼関係で成り立っているのだと思う。今後も、温かな協力体制の継続に努めたい。「子供たちのために」動いてくださる保護者、地域の方々のおかげで、子供たちは今日も元気に登校することができている。

4 おわりに

私は今、担任時代には味わうことのなかった特別な時間を過ごさせていただいている。学校と保護者、地域が一体となって子供たちを育てることのすばらしさを目の当たりにしている。子供たちを支えるすべての方に感謝をし、さらに結び付きを強固にできるように尽力していきたい。



「学校全体で取り組む特別支援教育」の実際 ～特別支援コーディネーター、 特別支援学級担任の立場から～

浦安市立高洲中学校教諭 しゅう みえこ 周 美恵子



1 はじめに

本校は、浦安市内で一番新しい学校である。湾岸地区に位置し、マンションに囲まれている。教育熱心な保護者が多い一方で、海外で生活したことがある生徒や外国人を親にもつ生徒も多く、寛容な雰囲気がある。また、新しい街なので、バリアフリーを配慮した環境となっており、通常の学級に車いす使用の生徒や麻痺をもつ生徒が在籍していたこともある。自閉症情緒学級（以下8組と表記）には、現在5名の生徒が在籍している。

2 特別支援学級在籍生徒たちの声

どの学級でも同様かと思うが、8組の生徒は8組が大好きである。「個別に丁寧に教えてくれる」「自信がついた」など8組のよいところを実感しながら過ごしている。

しかし、その一方で、通常の学級の生徒から、「どうして特別支援学級にいるのか」とか、「楽でいいと言われる」などの声を耳にしたこともある。

3 「学校全体で取り組む特別支援教育」の重要性

市内の特別支援学級の先生方と話す中で、様々な悩みを耳にする。

「通常の学級の生徒は、特別支援学級についてどう感じているのだろうか。」「将来どのように社会で活躍できるだろうか。」「本人は、自分の障害をどのようにとらえているのだろうか。」など。

そのような生徒、そして担任を支えるために、「学校全体で取り組む特別支援教育」を

実践することが必要だと考える。

また、盛んに報道されているように、昨年末の文科省の調査で、通常の学級に在籍する児童生徒の8.8%に発達障害の可能性があると発表された。発達障害の可能性のある生徒にとって「受容的な雰囲気の学校、学級づくり」は大切である。また、共生社会の実現をめざす国の方針が打ち出されていることから、時代のニーズでもあると言える。

4 「学校全体で取り組む特別支援教育」に取り組むポイント

(1)全校生徒に、特別支援教育について理解を促す機会を

私は学年開きなどの場面で、学年の生徒、またはクラスの生徒に特別支援コーディネーターとして話をする場面を設定している。

(2)交流及び共同学習を最大限に活用

どのように交流及び共同学習を進めていくのかを学校全体で共有していくことで、全校の職員を巻き込んでいくことが大切である。

(3)校長の理解とリーダーシップ

本校では、校長がリーダーシップを発揮してくださり、大変心強かった。常日頃から校長と密に話し合いをしておくとうい。

特別支援学級担任、特別支援コーディネーターが、校長とともに学校をつくっているという感覚になれるかどうかは、「学校全体で取り組む特別支援教育」を成功させる重要な要素だと感じる。

(4)学校評価アンケートの活用

自校の特別支援教育の浸透度について、数

値をもって評価することが大切である。その際に活用すべきなのが、学校評価アンケートである。その中に、特別支援教育の理解をどの項目で測るのかを計画しておくことが大切である。

本校では、「高洲中学校は、生徒一人一人を大切にしているか」という項目を毎年追って、特別支援教育の浸透度を確認している。

5 特別支援教育で見る高洲中の1年

本校の取り組みについて、以下に紹介していく。多岐に渡る実践のほんの一部であるが、参考にしていただきたい。

(1) 1年間の始まりで何を伝えるか

年度初めには、特別支援コーディネーターとして、各学年の集会で話をしている。「誰もが安心して過ごせる社会をつくるためにできることについて考えよう。」「みんなが他者を受け入れる気持ちがあれば、温かい気持ちが広がっていく。」といった内容である。大切なことは、特別支援学級在籍生徒のこのみの視点で話をしないことだ。特別支援コーディネーターが、どんな学校にしたいかという視点を持ち、それを全校生徒に伝えていくことが重要である。

(2) 生徒会活動に8組の生徒を巻き込む

本校では、8組の生徒を生徒会本部の「生徒会補佐」に選出している。本部の組織ということもあり、8組の生徒は誇りをもって、活動に取り組んでいる。

具体的な活動としては、行事の会場飾り付け、会場設営、募金活動の集計などの運営補助である。行事によっては、はじめの言葉、終わりの言葉を担当している。やるからには、全校生徒の気持ちを鼓舞できるような内容で立派な態度で発表しようと、8組生徒に指導している。文章と一緒に考え、暗記し、発表することが基本である。

また、部活動は、実態に応じて所属している。今年度は陸上部に2名、美術部に2名所属している。

(3) 小学校から中学校へ安心して進学できるように

通常の学級から8組に入級したある生徒について紹介する。6年生の段階で、本人、家族と話し合い、8組への入級を決めたものの、今まで一緒に学習してきた友達はどう思うか心配……とのこと。そこで、特別支援コーディネーターが小学校に出向き、学年全体に話をすることにした。彼は、じっくり考えて安心して学習できる環境を選んだことや、みんなも中学校で困ったことがあったら、先生方に相談してほしいということを伝えた。本人は、笑顔で入学式を迎えることができた。



昨年度の合唱コンクール
3年生のほぼ全員が有志として参加してくれた
8組の合唱

6 おわりに

受容的な雰囲気のある学校づくりこそが、特別支援教育の浸透のためには不可欠である。そのためには、全校生徒にどのようにアプローチしていくのか、そして、そのために職員がどのように連携していくのかを考え、学校づくりを進めていく必要がある。また、生徒に活躍できる場がたくさんあるということは、生徒が自己肯定感を高めて成長していく上で、大切なことだということを忘れてはいけない。



命を守る防災教育授業

しまむら たくや
鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校教諭 島村 拓哉



1 はじめに

近年自然災害が多発してきている我が国では、子供たちが自ら行う「自助」や「共助」の防災教育の大切さが必要とされている。とある研修の際にも、講師の話から、「いつまでも地元にいるとは限らない。大人になった時に海に近い所に住んでいるかもしれない。どんな所に住んでいても対応できるようにすることが大切。」と聞き、いつどんなことが起こっても災害に対応できる子を育てる必要があると強く感じている。しかし、実際の学校での防災教育は避難訓練の実施に留まるとい学校も多いだろう。だからこそ改めて、必要性を考えて実態に合わせた防災教育の充実を図っていくことが大切だと考える。

2 実践について

(1)実態把握

まず、子供たちの実態把握をするために、「各家庭で防災について話題があがったことがあるか」、「非常用持ち出し袋を用意しているか」というアンケートを実施した。すると半数以下の家庭は防災について話題に上がっていないと答え、持ち出し袋を用意している家庭は40%以下という結果になった。

このことから、家庭を取り込みながら防災への意識を高め、様々な場面で防災との関わりをもたせていくことが必要だと感じた。私は、教科等横断的な視点から教育課程を編成することが子供たちの防災への意識を高めていく一助となると考える。

(2)持ち出し袋の中身を考える

最初に、「持ち出し袋の中身を考えよう。」と課題を設定し、保護者参加型の授業参観で実践した。持ち出し袋がない家庭もあったので、班員と話し合いをしてその必要性を考えるようにした。内容は、身の回りにある物(下表)の中から八つ、バッグの中に入れる

軍手	ハサミ	箱アツツコ	缶づめ	缶切り	ローソク
メガネ	高価な指輪	通帳	サランラップ	電話	塩
雨具	家族の写真	化粧品	筆記道具	チョコ	ゲーム
下着	マスク	帽子	ビニール袋	ビタミン剤	常備薬
現金	ウエットティッシュ	紙コップ 紙皿	非常食	水2L	懐中電灯
携帯ラジオ	救急セット	ライター	電池	タオル	まくら
カイロ	SPカード ()	SPカード ()			

もの考えるというものだ。選択肢がある分児童が考えやすく、説明もしやすい。児童からは、後日持ち出し袋を用意しましたという嬉しい報告も届いた。

ゲーム感覚で、防災について興味関心を高めながら班で意見を進んで交流することができた。

(3)教科等横断的な学習

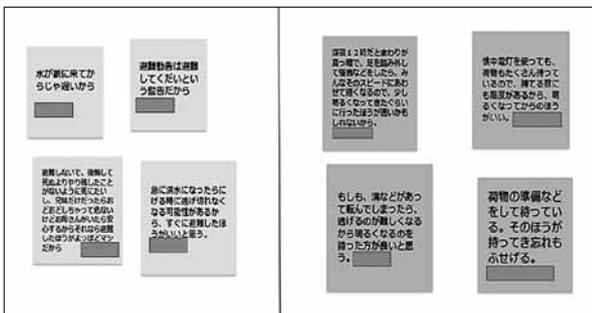
理科の「流れる水のはたらき」では洪水の動画を視聴して水の怖さについて学んだ。流水実験では、タブレットを活用して流れている水にカメラを近づけて洪水のリアルさを再現した。その他にも各教科で防災について話題を挙げていった。

(4)ALの授業 (アクティブラーニング)

ALを意識し、防災への意識を高めるために、テーマをもとに自分ならどうするかを考えるクロスロードを活用して授業を行った。

実際にあった事例を題材にし、ジレンマが生じる課題を提示したため、どの子も真剣に考えていた。今回は、「川沿いに住んでいて避難勧告が出た時に避難をするかしないか」というテーマで進めた。まずは自分で考えて意見を持ち、その後班で共有する活動をした。そうすることで様々な意見を聞き、どうすればよいかをより深く考えることができた。

また、本校では、ICTの研修も行っており、今回は、jamboardというアプリを活用して班ごとの意見を集約した。意見を大型提示装置に映し出し、他の班との考えの共有をわかりやすく行うことができた。



上図は実際に行った際の画面（左避難した方がよい、右避難しない）で、子供たちは、様々な考えが出たことでより悩みながらどちらにするかを考えることができた。

(5)避難所再現訓練

避難所再現訓練では、東日本大震災の時に、実際に避難所の責任者を務めた方を講師として招聘した。この訓練を子供たちが行うにあたり、前日に講師から「被災してどう感じたのか」、「避難所で何が必要だったのか」、「どういう人たちが避難所を運営していたのか」など実際の体験をもとに話をしていただいた。

当日の避難所再現訓練では、8つのグループと避難者に分かれた後は、子供たちが自分たちで考えて動くことになる。それぞれに任されていることを行っていくことで、避難所が運営されることになる。

① 総務班	そうむはん
② 設営班	せつえいはん
③ 受付班	うけつけはん
④ 炊き出し班	だきだしはん
⑤ 物資班	ぶっしはん
⑥ 衛生班	えいせいはん
⑦ 情報班	じょうほうはん
⑧ 連絡員	れんらくいん
⑨ 避難者	ひなんしゃ

上図が避難所再現訓練の係一覧となっている。それぞれが効率的に動くにはどうすればよいか、一人当たりのスペースはこれぐらいかなど、子供たちは積極的に話し合いをしながら進めることができた。また、子供たちからの感想には、「実際に被災したらこうして動けばいいと具体的に考えることができた。」や「自分でできることを考えて動くことが大切だと感じた。」など今回の訓練を受けて防災への意識の高まりが感じられた。また、講師の方からもよく考えて動いていたという評価をいただくことができた。

3 おわりに

今まであまり防災について話題があがることがなかったが、実践を終えてから学校での友達同士の会話で自然災害が起きた時の話や避難訓練の反省など、話題に挙がるが多くなった。この様子を見て、防災への意識の高まりを感じた。しかし、日が経つごとに防災についての話題が減ってきていて、日常的に考える機会が減ってきていた。日頃から防災について関心を持ち、日常生活と、結び付けて考えることができるようになるためにも、今回行った研究や実践をもとに防災教育の充実を図っていきたい。

防災教育の終わりではなく、どんな時、どんな所でも「自助」と「共助」の行動がとれる子供の育成を目指してこれからも取り組んでいきたい。



多面的・多角的な考えを引き出す 道徳科の授業づくり



八千代市立みどりが丘小学校教諭 まえだ 前田 あや 彩

1 はじめに

2021年1月の中央教育審議会答申で、予測困難な時代において、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが重要とされた。多様な他者への肯定的な気付きや、多様な他者との協働を支えるものの一つに、他者とともによりよく生きるための道徳性があると考えます。その道徳性を養うための道徳科授業の指導方法の工夫として、多面的・多角的な考えを引き出す方法について、実践から考えていきたい。

2 多面的・多角的な考えを引き出す工夫

(1)課題意識をもたせる

道徳科の教科書の多くの教材は、道徳的な事象や状況が記述されている。この道徳的な事象について意識をもたせることが大切である。例えば教材と同じような状況を思い起こさせたり、ねらいとする道徳的価値について自分の考えを見つめさせたりする。また家庭学習や読書活動の時間を使って教材を読み、自分なりの考えをもたせた上で授業を始める方法もある。そうすることで、児童が自分事として、教材や道徳的価値と向き合い、学習に向かうことができる。

(2)発問の工夫

①様々な立場に立って考える

児童に多面的・多角的な考えをもたせる視点の一つとして、道徳的事象に関わる様々な人の存在がある。自分（主人公）、相手、周囲の人など様々な視点に立って考える事で、物事の状況を俯瞰して捉えたり、立場による認識の違いに気付いたりすることもでき、道徳的価値の理解が深まる。また、道徳科の学習を通して、多様な「ものの見方や考え方」を養うことができる。

②時間軸を変えて考える

教材の中心場面や問題場面に対して自分事にすればするほど、「その時どんな気持ちだったか」や「どうすればよいか」など、考える時間軸が「今」になってしまう。そのため「このままにすると、主人公はどうなる？」など時間軸を過去や未来に移して考えさせることで、よりよい判断や、より深い価値理解に迫ることができる。

また、時間軸を変える発問を、授業の終末に行うことで、「よりよい未来」へのイメージがもてるようになる。例えば「こんな風に思ってくれる人が周りにいたら、どうかな?」「主人公のような考えの人がたくさんいる世界は、どんな世界だと思う?」などの発問で、道徳的価値のよさを改めて感じたり、「なりたい自分」についての思いをもたせたりすることにも繋がると考える。

3 授業の実際

(1)課題意識のもたせ方

「思い切って言ったらどうなるの」「良太のはんだん」（「ゆたかな心 小学道徳」光文書院）の授業では、導入で「よりよい判断に大切なものは？」というテーマ発問を行った。テーマ発問とは「教材のもつ主題やテーマそのものに関わってそれを掘り下げたり、追及したりする発問。」^{*1}を指し、永田氏（2014）は、テーマ発問をすることで「児童は主人公の心情ではなく、自分自身の考えを直接主張する機会は多くなる。」^{*2}としている。

またテーマ発問をすることで、授業を通して一貫した課題意識をもつことができ、その課題解決のために、多様な見方や考え方をすることの必要感をもつことができた。

(2)ワークシートと思考ツールの活用

前述した授業では、時間軸の移動について教師の発問から視点移動させるのではなく、ワークシートに「今」「未来」の言葉を入れ、それぞれに自分の考えを書き込めるようにした（図1）。

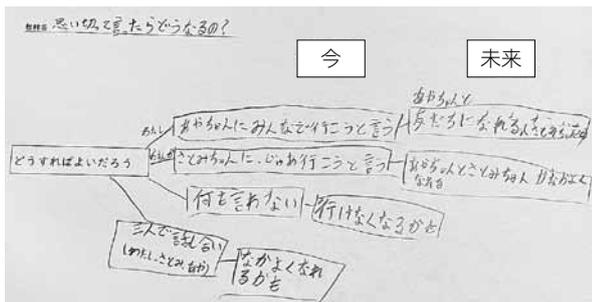


図1 時間軸の移動を意識させるワークシート^{*3}

また、中心的な発問についてタブレット端末でロイロノートを使用し、思考ツールを自分で選んで考えた（図2）。ロイロノートを用いることで、それぞれの意見がすぐに共有でき、道徳ノートに考えを書いた児童も、ノートの写真を撮ることで、全員が考えを共有することができた。



図2 板書とタブレットを用いた話し合い

思考ツールを用いることで、道徳ノートに文章で自分の考えを書くことが困難な児童も意欲的に取り組み、また自分の思考に合わせたマトリックスやクラゲチャートなど様々な思考ツールを選んで考えを表していた。児童からは、思考ツールの活用で、自分の考えを様々な視点から捉えることができ、考えをもちやすかったとの感想が得られた。

4 おわりに

子供たちから多面的・多角的な考えを引き出すためには、まず指導者が多様な見方ができることが肝要だと考える。それは、教材分析の視点だけでなく、児童の発達段階や実態など、どのような方法がよりよいかを、常に考え試しながら今後も道徳科授業や道徳教育、さらに新しい時代に求められる「生きる力」を育むための教育に取り組んでいきたい。

【参考資料】

- ※1 「考え、議論する道徳をめざして」永田繁雄 2016
- ※2 「道徳授業の発問を考える」永田繁雄 2014
- ※3 「多面的・多角的に考えよりよい自己決定につなぐ道徳科授業」山崎智子 2021を改変



学校で伸びる

失敗から学ぶ成長

八街市立交進小学校教諭 なら 奈良 ももか 百花



私は教員3年目になり、1年生を担当している。1年生は小学校の基礎になるため、学校生活のルールなどを細かく教えなければならない。初めての1年生担任だったため、上手く教えられるか不安があった。そして、実際に日々を過ごしていく中で、自分の指導力不足を痛感するようになった。そんな中、支えになってくれたのは、周りの先輩である。

ある先生は、「まだ3年目だから、できなくて当たり前だよ。」と言ってくださり、他の先生には、「こうしてみるといいよ」というアドバイスをいただいた。先輩は、自分の仕事もある中で、私の話を真剣に聞いてくださった。そして校長先生には、「子供たちが成長している部分もたくさんあるから大丈夫だよ。」という言葉を送っていただいた。私はそこでハッとした。私はできない子ばかりが気になって、頑張っている子に目を向けてあげられていなかったのだ。それからは、できないことではなく、一人一人の成長に目を向けられるようになった。

毎年、何かで失敗して落ち込んで、悔しい思いをしている。しかし、そこから学ぶことによって成長できていることも確かだ。学校とは、子供の成長の場だけではなく、教員も一緒に成長できる場だと思う。また、学校には素晴らしい先輩がいる。様々な先輩の実践を吸収しながら、自分に合ったものを見つけ、自分らしい教員を目指していきたい。



学校で伸びる

ともだちっていいな

県立夷隅特別支援学校教諭 あだち 足立 なおゆき 侃介



私は教諭になり、今年で8年目となる。今年度受講している中堅教諭等資質向上研修Ⅰのテーマでは「子供の対話に焦点を当てた授業づくり」を設定し、研修を進めている。現在担任をしている小学部1・2年生は他者を意識し始めた児童、言葉での表出はないものの伝えたいという意欲が強い児童など、他者へ関心を寄せる姿が増えてきた。その「芽生え」を大切に、自分の気持ちや要求を表出したり、自分や他者の良いところに気付いたりできるように環境を整え、授業を工夫している。

対話を意識した授業の中で児童たちは言葉には出さずとも「あ、こうやってやればいいのか」「ほくも〇〇さんみたいに褒められたい」と友達の様子に目を向け、様々な方法に気付いたり、いつも以上に意欲を示したりする姿が見られた。教師と二人だけでは気付くことができない学びが数多くあり、小学部にとって友達との対話の大切さを改めて感じた。

学習や生活の中での「なぜ? どうすれば?」という課題に対して、答えをそのまま教えるのではなく、教師や友達との対話の中で気付き、考え、解決しようとする力を引き出すことができるように環境の設定や授業の構成、言葉かけ一つ一つを見直し、PDCAサイクルを意識しながら改善に努めたい。また、対話的な学びにおいて児童の視点と教師の視点を整理し、双方のつながりのある授業を展開できるように尽力していきたい。